ブラキムラとめぐる！仙台城下町ボヤージュ【2022年10月4日放送分・北八番丁／神子町】

毎月第1火曜日に放送しています。歴史家で街歩きの達人・ブラキムラこと木村浩二さんと、旧城下町に88本ある石柱＝辻標から歴史の痕跡を探る旅です。街歩きのお供には、仙台市役所1階の市政情報センターなどで販売中の冊子、その名もズバリ「辻標」が便利です。88本ある辻標の場所や周辺の歴史が、写真とともに分かりやすく解説されています。

- 芭蕉の辻から奥州街道（現在の国分町通～青葉神社通）を北上する旅の途中。今月は北六番丁を北に越えた所からです。100mほど歩くと、東＝右方向に折れるT字路が。そのままさらに20mほど北上すると、西に曲がるT字路があります。つまり奥州街道を軸に、道路が東西に鉤型になっているのです。実は東西の道は、どちらも北七番丁。北番丁街区は武家屋敷が並んでいましたが、城下の端に近い北七番丁まで来ると足軽や職人の屋敷も交じっていました。時は身分制度の時代。武家と町人では、屋敷の奥行が合わないのです。そのため、まっすぐに道を通せなかったと思われます。
- ちなみに北七番丁は、西は土橋通から東は宮町通の手前の二本杉通まででしたが、大正14年に旧制二高が移転して来てからは東西に分断されたままです。後に東北大農学部のキャンパスとなった場所で、現在は病院や商業施設などとして再開発が行なわれています。

■ 北七番丁を越えてしばらく歩くと、北八番丁（この道は、奥州街道と直交しています）と出会います。ここを西に曲がり、通町小学校の敷地の南西角に、今月の辻標「北八番丁／神子町（みこまち）」があります。不思議な名前の「神子町」ですが、上杉にある朝日神社に関係のある巫女が住んでいたことから、その名が付いたとされますが定かではありません。たしかなことは、ここが良質な粘土の取れる台原―小田原丘陵に近く、古墳時代以降、焼き物が盛んな地域だったということです。奈良時代以降は多賀城や陸奥国分寺の、江戸時代に入ってからは北山地区の寺社の瓦を製造・供給する、瓦職人の町でした。伝統工芸の堤焼が生まれたのも、そうした土地柄があってのことなのです。

〈文・佐々木淳吾〉